

称号及び氏名	博士（人間科学） 多田 和外
学位授与の日付	平成21年3月31日
論文名	水のイメージと心理療法
論文審査委員	主査 川戸 圓
	副査 川原 稔久
	副査 吉田 敦彦
	副査 橋本 朋広
	副査 牧岡 省吾

論文要旨

水のイメージについての臨床心理学的研究の多くは、論文や書物の中の一部として水のイメージを取り上げ論じている程度で、体系的な研究はほとんどみられない。また先行研究の多くは、Jung.C.G.の“水は無意識や母なるものの象徴である”という言葉をもとに理解し、心理療法で現われた水のイメージを、すぐさま無意識や母なるものの象徴として捉えて考察してしまっている。つまり水のイメージが短絡的に単純化され、深みのないものとして解釈されてしまっているのである。そこで本論文では、先行研究の問題点を踏まえ、水のイメージに対する心理臨床学的理解の深化と新たな視座の獲得を目指し、実際の心理臨床活動に還元する事を目的とする。なお本論文は、序章、第1章～第4章および終章で構成されている。

序章第1節では、水のイメージについて心理臨床学的観点から研究を行なっていく際の足掛かりとして、創造神話、洪水神話、宗教的儀式に見られる水のイメージという3点から水の文化史を概観する事を行なった。世界中の多くの神話において水は、世界の創造と密接に関係している一方で、過去に世界を破滅させた洪水のイメージとしても語られる事が多い。また宗教的儀式において水は、死・再生・浄化などのイメージと関連が強い事がわかった。そしてそれらを概観する事で、人類は長い歴史の中で、水に対し特に創造的側面と破壊的側面に強い興味関心を持っていた事が理解できた。

序章第2節では、臨床心理学における水のイメージに関する先行研究について概観し、

多くの研究に共通して見られる特徴として、水が無意識の象徴であり、水のイメージの現われ方や関わり方を通して、自我と無意識との関係を読み取り、かつ治療プロセスを通して、どのように水・無意識との関係を築くのか、どのように母なる無意識から自我を分離させ自我を確立させるのか、あるいはどのように新しい自分として生まれ変わるのか、などのテーマに着目して研究がなされている事を明らかにした。

序章第3節では、本論文の目的および論文の構成を示した。

第1章第1節は、水の世界を非日常的な世界としての「異界」として捉え、各人の中で印象に残っている水にまつわる体験を質問紙によって調査し、個別面接を行なうことで、個人の内的世界において水の世界がどのように「異界」へと変容するのかを明らかにし、人が「異界」としての水とどのように関わるのかを明らかにする事を一つの目的とした。また「異界」としての水の体験がどのように心の位相を動かすのかを明らかにする事を二つ目の目的として研究を行なった。その結果、水の世界に入っていくためには、内的な準備作業が必要であり、また「守り」が必要である事がわかった。また、その際の心の位相の変化は、内的な準備作業と並行してじょじょに行なわれるものである事が明らかとなった。

第1章第2節では、九分割統合絵画法（NOD）とSD法を用いて、水のイメージについて心理学的観点から調査研究する事を目的とした。その結果今回筆者が行なった調査からは、水のイメージの一側面として「聖母」「アフロディーテ」「ニンフ」の3因子が抽出され、また天上から地上へと広がる垂直軸次元に広く水のイメージは分布している事が明らかとなった。

第1章第3節は、水のイメージに関する調査とバウムテストを用いた調査から得られた結果を比較検討する事を目的とした。山中（1973）のバウムテストの分析方法を用いた場合、「バウムテスト2枚実施法」では、1枚目と2枚目との間で、バウムの枝や実や輪郭線に変化が見られやすい事が明らかとなった。それを踏まえた上で、水のイメージと筆者独自の指標である「はみ出し型」バウムとを比較検討した結果、水に対して“異界”イメージを持ちやすい人は、バウムが用紙から突き抜ける、あるいははみ出す傾向がある事が示唆された。

第2章第1節は、Jungの生涯を水のイメージを中心に振り返り考察を行なった。その結果、Jungはその生涯でたくさんの水の体験をしており、それらの体験がJungの心理学に大きな影響を与えている可能性がある事が明らかとなった。

第2章第2節では、従来一般的に行なわれている水のイメージに関する臨床心理学的観点からの解釈の短絡さ・単純さ・深みのなさの問題を指摘し、それらの問題を乗り越えるために Jung, C.G.の水に関する論述を基にしながら、臨床心理学的観点から水のイメージに対して深みを与えるために様々な観点から考察を行なった。その結果、①水の自律性、②水に対する我々の受動性、③水の無限性、④水の垂直性、⑤水の異界性、⑥日本人の水への親和性、の6点が明らかとなった。

第3章第1節では、『作庭記』を基に、日本庭園における作庭のプロセスについてコスモロジーの観点から考察を行なった。その結果、作庭のプロセスは垂直軸次元と水平軸次元へとコスモスが展開していくプロセスそのものであり、その際に石を“立てる”事の重要性が明らかとなった。

第3章第2節では、第1節を踏まえて、庭園における水についての心理学的考察を行なった。その結果、庭園における水は、本来下方から湧き出る神聖なる水であり、作庭の始まりは、まずこの下方の水と繋がる事から始まる事がわかった。水が湧き出る下方は一つの異界であり、作庭を行なうためには、まずこの下方の異界とこちら側の世界という一つの大きなコスモロジーが成立している事が必要である。それを前提として、下方の異界からのエネルギーを受け取りながら大地を整え、石を立て、垂直軸へと開かれていき、イメージが庭の構成要素に受胎していき、それによって庭の水平軸次元も豊かになっていくという作庭のプロセスが明らかとなった。それらを通して、箱庭制作を見守る側の箱庭を見る1つの視点として、箱庭の中にコスモロジーを見て、どのようにコスモスが形成されていくのかに着目する事が有用である事が示唆された。

第4章第1節は、情緒障害児短期治療施設に入所する女兒とのプレイセラピーについての事例研究である。セラピーの中で表現された水を通して、エロスの側面としての水のイメージと、エロスの側面が発動するための前段階として分離・分化が必要である点が明らかとなった。

第4章第2節では、箱庭が制作された二事例を呈示し、水のイメージを通してコスモロジーの視点を導入し、“未分化”と“分化”という視点をもって治療プロセスを読み解いていくという試みを行なった。心理療法場面で水のイメージを扱う場合、水の能動性・自律性を奪ってしまうような反自然な在り方ではなく、水の能動性・自律性を尊重しながら水に自然な枠組みを与えるような在り方が重要である事が明らかとなった。またその際、水のイメージにコスモロジーの観点を導入する事の重要性も示唆された。

第4章第3節では、実際の心理療法場面で、セラピストが水とどのように向き合うべきかについて論じた。そして心理療法で水のイメージが表現された場合、セラピストはそのイメージをしっかりと能動的・主体的に捉え、かつイメージの水か実際の水か、危険か安全か、快感原則か現実原則か、あちら側かこちら側か、コスモスか混沌か、創造性か破壊性か、などの様々な対立的思考の中を弁証法的に把握し続けておく必要がある事を明らかにした。そのためセラピストは、常に能動的主体的にイメージと関わり、イメージにコスモロジー的視点を導入しておく必要がある事が示唆された。

終章第1節では、本論文全体の検討のまとめを行なった。本論文を通して明らかとなった水のイメージに対する新たな視座としては、水の自律性、水に対する我々の受動性、水の無限性、水の垂直性、水の異界性、日本人の水への親和性の6点が挙げられるであろう。そして心理療法場面で我々治療者が、それら水のイメージと向き合う一つの方法として、水のイメージにコスモロジーの観点を導入する事が有効である事が明らかとなった。そして上記の6つの観点が治療的に生きてくるのも、コスモロジーの観点を導入する事によってである事がわかった。水のイメージと向き合う際の明確な視点（つまり上述の6点とコスモロジーの視点）がある事で、治療者は、治療の流れを見失う事なく、水のイメージを様々な対立的思考の中で弁証法的に捉えていく事が可能となるのである。それによって、表現された水のイメージの本質に近づく事ができるのだと考えられる。それは、水のイメージを全てコスモロジーの観点到還元するのではなく、コスモロジーの視点を通して、より豊かな水のイメージへと開かれていく事を意味している。

終章第2節では、水のイメージに関する臨床心理学的研究についての今後の課題と展望について述べた。つまり、モダンな意識のあり方からポストモダンな意識のあり方へという意識の変容、解離性障害の増加、情報化社会における情報の氾濫という状況の中で生きる人々の心の深奥で、水はどのようなイメージを担い、心理学的にどのような役割を果たしているのかについて、今後の研究課題として挙げた。

学位論文審査結果の要旨

人間社会学研究科人間科学専攻心理教育分野における学位授与の条件として、臨床系心理学の領域においては、①査読つき論文が二本以上あり、それらが学位論文に含まれていなければならない、また②業績には、英語論文あるいは国際学会・シンポジウムでの発表が一編以上含まれていることが望ましい、という申し合わせがある。申請者は日本箱庭療法学研究に二本の論文を受理されており、そのうちの一本は英語論文（平成20年12月に正式受理）であるので、この申し合わせを満たしている。また心理相談室紀要に平成17年、18年、20年と研究論文を執筆している。日本箱庭療法学会で二回研究発表を行い、学会の研修会でも事例発表を行うなど旺盛な研究活動を展開している。申請者の研究がイメージに関わるものなので、イメージに関する論文の宝庫である日本箱庭療法学研究および日本箱庭療法学会に偏る嫌いがあるのは、ここしばらくイメージについての研究成果を確立するためには致し方ないものと判断する。

さて審査委員会は平成21年1月30日、2月3日、2月4日の三回にわたって開催された。但し牧岡省吾准教授は、職務の都合上、第一回の審査委員会への参加のみで、それ以外は意見書の提出ということになった。以下、論文審査結果の要旨である。

本論文は、水のイメージについての心理臨床学的研究を幅広い観点から究め、それについてにより豊かな視座を獲得し、その知見を心理臨床実践に還元することを、目的として成り立っている。臨床心理学は、「学」と「実践」が車の両輪であるので、どちらをも等しく重要視しなければならない。申請者も「実践」を積み重ねる中で、治療の展開点で出現する水・水のイメージにこころ魅かれ、それを「学」として究め、究めた成果を再び実践で生かし、さらなる「学」としての問題点に焦点をあてることを目指している。つまり「学」と「実践」との循環運動の中ででき上がったのが本論文である。

以下、序章、終章を含めて六章からなる論文の構成にしたがって、各章の要点と評価されるべき研究成果を述べることにする。

序章は三節からなる。Kochがバウムテストを作り上げた時に、「木の文化史」から論を起し、なぜ樹木画が人のこころにとって深い心理的な意味を持つのかという問いに、文化的・歴史的に答えて行く形式で始めたのにならって、申請者も「水の文化史」を取り上げて、水と人のこころとの関係に焦点を絞ることで、研究テーマの絞り込みを明確にしたの

が序章である。またこの章で先行研究も調べ、先行研究の問題点と本研究がその問題点を凌駕することを目的としていることが明確に述べられ、それが研究の導きの糸となっている。

第一章「水のイメージに関する調査研究」は三節からなる。この章は調査研究である。第一節では「水」を体験することによってこころの位相が変容することを、まずは質問紙調査から明らかにした。その歳に、「水」を体験する場合には、内的な準備作業と内的な「守り」の必要性が明らかになり、心理療法においてクライアントが「水」を体験すればいいというものではなくて、体験に先立って、十全な準備作業と「守り」が必要であるとの理解を導き出した。第二節および第三節では九分割統合絵画法を水イメージの体験を膨らませる手段として使用し、その体験の前後にバウムテストを実施し、水のイメージの体験がもたらすこころの位相の変容をバウムテストの変化から明らかにするという手法をとった。この手法は極めてユニークで、「水のイメージ体験によるこころの位相の変容」に新たな知見を加えることとなった。それには自我境界の意識化、自我の強化などがあげられる。第二章「水のイメージと Jung」では、臨床心理学の分野で、イメージ論、シンボル論を展開した巨人の一人である Jung を取り上げる。第一節で Jung の『自伝』を読み込み、Jung 自身の水の体験に迫っている。『自伝』が通常の自伝とは異なり、「無意識の自己実現の物語」と称されることもあり、意識と無意識の一つの戦いの物語として水の体験を整理し、ここから水の特徴が抽出されている。これらはまた前章の調査研究の結果とも重なるものであるが、新たな視座としては「水イメージの垂直軸次元」がある。水の層がそのままこころの層となっている。第二節ではユング論文の、水に限定しての文献研究となり、この問題が論じられる。ここまでの章で明らかになったことを要約すると①水の自律性、②水に対する自我の受動性、③水の無限性、④水の垂直性、⑤水の異界性、⑥日本人の水への親和性となる。最後のものは自我確立のあいまい性といいかえることもできよう。西洋人 Jung との違いである。

箱庭療法は最初はロンドンで、そして本格的にはスイスの Kalff によって始められたものであるが、日本で最も多く用いられている療法である。第三章「水とコスモロジー—庭園と水に関する心理学的研究」では箱庭療法と水との関連から、「庭」を作り出すプロセスを心理学的に見ていく。第一節で『作庭記』の臨床心理学的分析をおこない、第二節では庭園における水を論じ、無秩序の中に一つの秩序を生み出す作用、でき上がった一つの秩序ともう一つの秩序をつなぐものとしての水を浮かび上がらせ、コスモロジー生成の作用

を見抜いていく。ここで、箱庭が作られる場合、クライアントは一つのコスモロジーの生成に向き合っているとの新たな知見が加えられる。この成果は大きい。第四章「心理療法における水のイメージ」では申請者が取り組んできた事例が三例紹介される。いずれもが治療力を問われる困難事例であるが、水イメージの研究が見事に生きている実践の報告ともなっている。研究と実践の見事な一致がみられる。終章「水のイメージと心理療法」では今後の課題と展望が論じられる。

本論文は調査研究、文献研究、事例研究という多様な方法論を果敢に用いることによって可能となった論文である。各々の研究法の精度を高めることが今後の課題の一つでもあるが、この複数的アプローチによる多角的研究に本研究のオリジナリティーの一つもあるので、その点を高く評価したい。審査基準に関する申し合わせに照らし合わせてみても、その成果は十分に評価できる。よって、本研究は博士（人間科学）の学位を授与するに値すると判断する。